山あり谷あり笑いあり

女性美容師インタビュー

仕事は楽しいけれど、一生続ける？ 結婚・出産したらどうしよう？ 悩める女性美容師さん、諦めないで！ せっかく女性に生まれてきたから、夢も恋も仕事も全部がんばりたい、そんなみんなを応援するインタビューです。第6回は、独立し、家庭と仕事の両立を目指す梅澤早苗さんにお話を伺いました。

text: Miki Umezu

西澤真紀

1981年、滋賀県出身。京都理容美容専修学校通信課程を卒業。京都府内1店舗を経て、滋賀県にあるLIVESに入社しオーナーの濱田氏に師事する。2005年三都杯ウイッグ部門でグランプリを取得、2011年にはスター育成プロジェクト「D1」で近畿代表に選ばれるなど技術力に定評が高い。

vol.7 西澤真紀 [LIVES]

先輩と折り合いがつかず、1店舗目を退社 自分の弱さと小ささを痛感する

写真では元気そうですが（一番右）、実はかなり落ち込んでいます（笑）。美容師を辞めるつもりはなかったので、引きこもりのような生活をしながらも、通信の勉強は続けていました。

21歳。LIVES＆オーナー濱田さんと出会う 美容の母は厳しく、でも愛情もたくさん

真ん中が濱田、私は前列左側です。今の私があるのは、濱田を始めLIVESのみんなのおかげ。運命の出会いって本当にあるんだなぁと思います。

カットの出来が悪く、怒られっぱなし 27歳でデビュー！ リターンはほぼゼロ…

講習会の後のメイクショーで、後列右2人のヘアメイクを担当した時の1枚（前列左）。周りの熱いスタッフに感化され、クリエイティブやデザインに興味を持つようになったのは自然の流れでした。その分、自分の下手さ具合に落ち込んでしまうのですが…。

突然過ぎる濱田さんの死に、スタッフは呆然 周りの温かい支えがあり、前に進み始める

D7メンバーの皆さんを始め、濱田とお付き合いのあったたくさんの方々に支えて頂き、今のLIVESはあります。華やかな人だったから、元気に送り出そうと「YOSHIMI NIGHT」を2010年2月に行いました（前列右）。

甘えていたダメな自分を変えたい！ 撮影や講習など積極的に参加し、意識改革

Shinbiyo 2012年6月号「今月のパワープッシュ」

濱田亡き後、手探りで始めた撮影もやっと自分の作りたいモノが見えてきました。Shinbiyoに掲載されるなんて夢みたいです！ 右の写真は、D1で近畿地区の代表に選ばれ2011年の合宿に参加した時のもの（前列右）。同世代の仲間との交流で、いい刺激をたくさんもらっています。

失敗を恐れずチャレンジを繰り返す 少しずつ自信が付き、光が見えてきた31歳

NOW!

新生LIVESはまだまだ始まったばかり（右から3番目）。私の役目は、外部とのコネクションをつなぐことだと思っています。引っ込み思案だった私がここまで変われるなんて、我ながら驚きです（笑）。

自信が持てない自分を「変えたい」ではなく「変える」。
甘えを捨てたら、少しずつ未来が拓けてきました。

人間関係が原因で1店舗目を退社 2店舗目で運命のサロンLIVESに出会う

コミュニケーションを取るのが苦手で、引っ込み思案。これが元々の私の性格です。仲良くなった人には関西独特のノリで心を開けるんですけどね(笑)。美容師になってからは、技術の未熟さから自信の無さも加わって…。でも問題を感じながらもそこまで支障はなかったし、そのままずっと過ごしてきました。そんな私が「変わらなきゃ」と初めて感じたのは29歳の時。2店舗目LIVESのオーナー、濱田(※①)の突然の死がきっかけです。

実は1店舗目は、入って半年ちょっとで辞めちゃってます…。理髪店を営む両親の影響もあり、美容師を志すことに。だから仕事は好きだったし、美容師を諦めようと思ったことは1度もありません。原因は1コ上の先輩と上手くいかなかったこと。今思うとイジメなんて大げさなものじゃなくて、ちょっとキツく当たられた程度。でも、当時はいっぱいいっぱいになっちゃったんですよね。

辞めたのはいいけれど、次に働くあてもなく実家にも内緒。考えるのは「本当に辞めて良かったのかな」とかネガティブなことばっかりでした。年が明け、思い切って両親に打ち明けたら「じゃあ帰ってき」と。地元の彦根に戻って、久しぶりに高校時代から通っていた洋服屋さんに行ったんです。そこで働いている顔見知りの店員さんに辞めたことを話すと「僕の奥さんが近くで美容室やってるからおいでよ」と誘ってくれて。不思議な縁に導かれるようにLIVESに入社が決まりました。

デザインの楽しさを覚えるも上達せず 力量不足にジレンマを抱える

LIVESと濱田は人生を変えてくれた大切な存在です。環境やスタッフとの相性って絶対あるはず。入社したばかりのアシスタントさんたちも、悩み始める時期かもしれませんね。何度もコロコロ変えるのは問題だけど、1〜2回なら美容を続けるために必要なステップとして考えてみてもいいのかなぁって思います。って、今でこそこんないい話みたいに語れてますが(笑)、毎日怒られてばかりでボロボロだったんですよ。それでも、続けてこれたのは愛情を感じていたから。美容の先輩としてだけでなく、親が子に接するように厳しくでも愛情たっぷりに教育してくれました。

デザイン改革(※②)に参加したりと、技術とデザインにこだわるサロンだったから、コンテストにも積極的。カットを習う前からウイッグ部門にエントリーしていました。デッサンして、自己流フリーハンドで形を作る。カットって面白い! でも、その楽しい気持ちがしぼんでしまったのは、レッスンが始まってすぐのことです。カラーやパーマは飲み込みがいい方だったのに、本当に全然できなかったんです。何が分からないかも分からなくて、お手上げ状態。ヒドいものでした…。

27歳でなんとかスタイリストデビューをしたけれど、自信なんてありません。新規のお客さんをまわしてもらっても、当然リターンはほぼゼロ。かと言って営業をかけれるほど行動派じゃないし、唯一やってきた技術もダメダメだし。どうしたらいいんだろう…。デビューして1年半が過ぎた春、そう思っている矢先に濱田の病気が発覚しました。

故オーナー濱田さんの遺志を継ぎ 引っ込み思案だった自分を変える!

検査入院の予定が手術になって、成功したと思ったのに、またすぐ再入院。心の準備もできないまま、秋に旅立ってしまいました。目の前が真っ白になって、気付いたら涙が溢れるばかりで。LIVES=濱田ブランドだったから、お客さんだけじゃなく私もお店を畳むことになるんだろうと覚悟していたんです。

でもマネージャーの濱田が(数年前から洋服屋の店員を辞め、経営に携わっている)最期の言葉「LIVESをお願いしますね」を伝えてくれた時、不安とか全部吹き飛びました。お客さんはいなくなってしまうかもしれないけれど、濱田が残してくれたLIVESを守ろうってスタッフ全員で決めたんです。

技術力が全然足りなかったので、濱田と一緒に活動していたD7(※③)のメンバーやDelsigNさんが合同練習会を開いてくれました。技術はもちろん励まして下さる人の温かさに胸がいっぱいになって…。D7で定期的に行っていた撮影会も、私が引き続き担当させてもらうことに。今まで前に出ることがなかったから、外部の方と触れ合う機会はなかったんです。でも濱田が、交流するための道を残してくれた。一度きりの人生なんだから、失敗を恐れるのはやめよう。これからは、私が外からの風を吹き込むんだ! 初めて、自分の存在意義が感じられた瞬間です。

私が変わったのはそこからですね。とにかく、自分の足で一歩を踏み出そうと思って、DDA(※④)に通うことに。必死に通う内に少しずつですが自分の技術に自信が持てるようになりました。LIVESを守り抜くために死ぬ気になって変わったら、やっぱりお客さんにも気持ちが伝わるんでしょうね。一時期は半分に減ったけれど、3分の2まで戻ってきてくださるようになりました!

30歳を過ぎた頃から努力が少しずつ報われて、真っ暗闇な世界に光が見え始めてきました。努力したら必ず結果は出るって、濱田が自分の命と引き換えに教えてくれたんだと思っています。でも満足することなく、もっともっと前に出ていきたい! いくつになっても向学心とチャレジする精神を持ち続け、お客さんだけでなくプロに認められるデザイナーになるのが私の目標です。

Maki Nishizawa

※①:濱田佳美(はまだ・よしみ)享年47歳。JHAやKHA、三都杯など数多くの賞を受賞し、雑誌やセミナーなどで精力的に活動。LIVESの可能性を限りなく広げた創始者の想いは、スタッフの心に存在し受け継がれ続けている。※②:DADA植村氏・snob吉田氏が共同で主催し、2002年から3年間行われたワークショップ。※③:デザイン改革1095で誕生したヘアデザイナーユニット。※④:DADAデザインアカデミー。